

二、諸子百家の時代（一）――儒家・墨家――

- ・子曰、温故而知新、可以為師矣。（『論語』為政篇）
- ・子曰、吾十有五而志学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。（『論語』為政篇）

一、諸子百家の時代

一・一、周王朝の衰退と身分制秩序の崩壊

二千数百年前、周王朝の時代。その統治体制は、下剋上の風潮とともに次第に破綻。

春秋時代 多数の封建諸国が並立。王朝の衰退↓「¹」

末期 大規模な長期戦争（長江下流の呉と越の戦い）の勃発。

戦国時代 晋の有力貴族「韓」「魏」「趙」が政權を三分割。周王朝の衰退、諸国の称王。

侵略戦争が多発。「²」が割拠する時代。

一・二、富国強兵と学者の招聘

戦国時代、各国は自国の存立や理想的国家の建設に向け、思想家を招いて優遇。

代表的なのは、斉国の「³」 （思想家を集め、議論・著述に専念させる）

そうした風潮の中で、思想家たちは、自らの思想を構築し、諸国をめぐって熱き夢を説く。

↓諸子百家の時代。特に、儒家と墨家は「⁴」 （世に顕れた学派）と称される。

二、儒家

二・一、孔子の生涯

前五五一年 魯の国で生まれる。（前五五二年という説もある）

幼少時 俎豆を並べて遊ぶ。↓大人のまねをして「⁵」 の稽古に励む。

三十歳頃 魯の君主から遊学を許され、周の都に行つて礼を学ぶ。

三十五歳頃 魯で内乱。隣の大國斉に赴く。韶（古代の舜のときの音楽）を聴き、感動。

斉の景公から政治について問われ、「⁶」 の重要性を説く。

宰相の晏嬰は孔子の優遇に反対し、斉を去ることに。

五十歳頃 魯に帰る。中都の宰（長官）↓司空（土地・人民の長官）↓大司寇（司法大臣）

↓魯の政治中枢には受け入れられず、失望して魯を去る。

孔子の諸国遍歴の旅：迫害に遭いながらも、理想を説き、弟子の就職に努めたが、結局は大きな成果を得られないまま魯に帰国。晩年は、郷里で弟子の教育と著述に専念。

前四七九年 七四歳の生涯を終える。

◎孔子の思想――「⁷」 の中の断片的な言葉として残される。

二・二、外から人を規制する「⁸」

「⁹」 ……国家が制定した法にもとづく制裁。もともと人民に公布されるものではなかった。

春秋時代―世の中の乱れ↓法の内容とそれを犯した場合の刑罰を人民に示す↓「¹⁰」 実定法

民は法の網の目をくぐりぬけようとする。↓「¹¹」 「¹²」で導き、「¹²」で整える。

「礼」……礼儀や慣習。一定の拘束力を持つが、法のように明文文化されておらず、刑罰のような

強制力はない。（礼を守るかどうかは、あくまでその人の品格の問題。）

「¹³」 が礼を尊重することによって、民の心におのずから恥の気持ち芽生える。

◎「礼」―実践することにより人間に品格を与えようとするもの、外側から人間を美しくするもの。

二・三、道德の根本としての「¹⁴」

内なる心として重視。子に求められる家庭内の道德。子がよく親につかえること。

『論語』で最も多く語られる徳、「¹⁵」 （思いやり）でさえ、孝が基本になっている。

（思いやりの具体的なあり方は、まず親に対する愛であり、年長者に対する敬意である。）

◎「孝」―人間の最も素朴な心情を、あらゆる道德の基盤として重視するもの。

二四、孔子門人たちの活動

孔子の弟子・門人たちは、孔子の思想を大きく二つの流れとして継承。

・内なる心を重視する学派

曾子：「孝」にすぐれた弟子とされ、『孝経』の著者と目される人物。

子思：孔子の孫。曾子に学ぶ。『中庸』の著者とされる。

「¹⁶」：子思の門人に学ぶ。¹⁷」を説き、内省の重要性を力説。

・礼を重視した系統

子游：特に礼の精神面を尊重。 子夏：礼の形式を重視。

「¹⁸」：戦国時代末期の人物。¹⁹」を説き、学問と²⁰」

による自己修養の必要性を説く。礼学の系統を大成。

↓漢代に至り、²¹」という国家教学となっていく。

三、墨家

三一、墨子の思想

孔子が亡くなってから間もなくして、墨子が活動を開始。

「²²」——兼愛・非攻・尚賢・尚同・節用・節葬・天志・明鬼・非楽・非命²³

A 「²³」
墨子は、天下の「乱」の原因を追究。

↓人々が「自ら愛して」、他者を愛さない。自分の「利」だけを追求し、他者を「虧」く。

親子・君臣・兄弟関係にも当てはまり、盗賊が他者から盗み、戦国の諸国が他国を侵略する際にも該当。↓天下の乱れはすべて「²⁴」
「²⁵」ことによって起こる。

◎ 「²⁵」自分を愛するように他人を愛す

天下中の人々が、兼愛の精神に目覚めれば、上位者は「²⁶」の心を持ち、下位者は

「²⁷」の心を持つて、世は自ずから治まっていくなと主張。

博愛・平等愛ではなく、自己への愛と他者への愛との間に区別を設けてはならないとするもの。

B 「²⁸」

兼愛の理想を最も破壊するもの↓強大国による「²⁹」

兼愛の思想を基盤として非攻を説き、侵略戦争阻止という実践活動に奔走。

一人を殺せば、人は皆、「人殺し」と声高に叫ぶ。当然死罪が適用される。

それなのに、大量殺人を犯す侵略戦争は、なぜ不義だと言われないのか。

↓天下の「³⁰」と「³¹」のとらえ方には重大な誤りがある。

◎ 侵略行為を非難。自ら戦闘集団を組織して、「³²」に出勤。

当初、墨家集団に入ってくる門弟たちは、さまざまな迷惑をもって集まってくる烏合の衆にすぎ

なかったが、墨家の首領である「³³」の統率により、やがて彼らは精鋭な思想

集団、軍事組織へと変容していった。侵略戦争によって落城の危機に瀕した城邑があると、そ

の救援にかけつけ、多彩な守城技術によって弱小国の危機を救った。

◎ 「³⁴」：堅い守りの意。もともとは、墨家の守城能力の高さを賞賛する言葉。

三二、墨家集団の組織性と衰亡

墨家集団は、秦漢帝国の成立とともに、忽然とこの世から消えうせる。

強固な組織性と「義」の精神↓墨子における「³⁵」。

「³⁶」：…たとえ上位者と言いつ争いになっても、その不正をただすこと。

儒家—三度諫めて聞き入れられなければ臣下の方が身を退くのが礼。

墨家—一度諫めた以上はそれを貫徹し、聞き入れられなければ、「³⁷」。

墨子の死後

鉅子の孟勝は、楚の陽城君の要請に応えて、その城邑防衛に当たった。しかし、楚王の直轄

軍の攻撃を受けて敗退。このとき、孟勝は陽城君に対する契約を履行できなかったとして、

「³⁸」しようとする。弟子は、墨者が全滅し思想も途絶えたと反論するが、

孟勝は義のために死ぬことこそが墨家の思想を後世に存続させる唯一の方策であると説得し、

ついに全員が自決する。

↓墨者のあり方を端的に示す事件。墨家の急速な衰亡には、墨家の基本的体質が関わっていた。